次郎長

次郎長翁を知る会
会報　第26号
平成22年3月31日発行
発行所　〒424-0821
静岡市清水区相生町6－17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)352－7331
発行人 題字　竹内　宏
編集人　田口英爾
印刷所　㈱ニシガイ
TEL (054)352－2188

岩波新書「清水次郎長」を読む

正史を一撃と銘打ち、次郎長の生きざまに歴史学の視点から迫ったとする力作。しかし「東海遊侠伝」出版の動機、望嶽亭伝承など看過できない問題点ありだ。

平成二十二年一月に発行された岩波新書（赤版）の「清水次郎長」は高橋敏国立歴史民俗博物館名誉教授の著作である。編集子には、次郎長や大政などの顔写真提供の返礼として新刊一冊が送呈されたので、読む機会を得た。

編集子が高橋教授に初めてお会いしたのは、今から十五年前の平成七年、佐倉市の国立歴史民俗博物館の研究室におたずねした時である。明治元年から二年の矢田部盛治（三島大社神官）の日記を解読していただくためであった。難読の崩し字を、先生はその場ですらすらと読み進め、編集子は必死になってメモをとったことを憶えている。その内容は本誌第五号（平成七年一月発行）の「矢田部盛治日記と次郎長」に紹介されている。それから九年を経て、歴博では高橋教授が中心になって「民衆文化とつくられたヒーローたち《アウトローの幕末維新史》」と銘打った企画展示が催され、私は次郎長関連の委員として参加させていただいた。

昭和17年出版の「東海遊侠伝」

したがって、今度の新著について、評価を云々するとか、批判めいたことを言う立場ではない。またそのような知識や力量を私は持ち合わせていない。ただ本書を通読してみて、看過することができない点が二つあったので、あえて指摘し、本誌の読者に理解を求めることとした。

看過できない二つの点の第一は、『東海遊侠伝』の出版が、賭博の罪で投獄された次郎長を救うためであるとする説。

第二は、西郷山岡会談を実現したのは、山岡の望嶽亭への避難と、次郎長の駿府案内によるとする伝承を、「充分肯ける」とする説。

「東海遊侠伝」出版の目的

岩波新書「清水次郎長」（以下本書）では、まず「はじめに」で、「本書は使い古された感がある『東海遊侠伝』を見直し、歴史学の視点に立って実像の清水次郎長にアプローチする。」と位置づけている。続いて著者天田五郎の生い立ちや、父母妹探索の途次、次郎長の許に身を置く数奇な運命を紹介。「次郎長一代記を水滸伝張りに書き上げ、」

「これが『東海遊侠伝』と銘打って世に出たのは、明治十七年（一八八四）の博徒大刈り込みで次郎長が逮捕され、下獄したことによる。」（傍線筆者）としている。

さらに本書は、『東海遊侠伝』命名の拠り所として『史記』の「遊侠列伝」を挙げ、（P10）の末尾に、

「愚庵はあえて恩ある獄中の大侠次郎長を救出すべく『東海遊侠伝』と題して次郎長の名誉回復を図ったのである。」

と記し、『東海遊侠伝』出版の目的が、投獄された次郎長救出にあると、重ねて強調している。

私は、その説を肯定することはできない。

次郎長が逮捕収監されたのは、明治十七年二月のことである。

「明治十七年二月二十五日朝、長五郎ほぼくに相成候」で始まる長い手記を、次郎長の妻おちょう（三代目）は残している。刑事による家宅捜索をはじめ一部始終を書き留めたものだが、おちょうが真っ先に手配したのは、東京にいる五郎を呼び寄せることであった。養子として入籍し山本姓を名乗る五郎は、すでに前年（明治十六年）の七月には上京しており、神田淡路町に下宿、『東海遊侠伝』出版の準備を進めていた。

おちょうは息子の清太郎（入谷）を二月二十五日上京させ、五郎は清太郎と同道して二月三十日に清水へもどったと、おちょうの手記にはある。

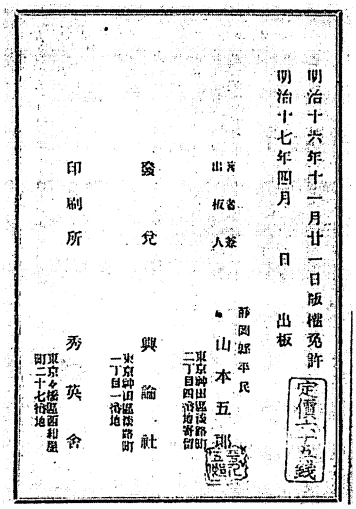
次郎長逮捕という出来事は、おちょうにとってばかりでなく、養子五郎にとっても全く予期せぬ出来事であった。井宮監獄の面会、嘆願書の作成など、五郎は養母おちょうを助け、一か月清水に滞在して再び上京した。四百円という高額の罰金については、五郎は自分が引受けると言い、養子縁組についてはすでに解消する話が進んでおり、そのことについては親友である中井俊之助に委細をたのんであると養母に言って、五郎は三月三十日に東京へ立った。

『東海遊侠伝』の出版は、高橋説のいうごとく「入獄した次郎長救援のため」実現されたものではなく、すでに前年、明治十六年から出版準備がすすめられていたのである。

この時期、東京の五郎から発信された手紙が残されている。明治十六年七月二十日付、次郎長とおちょう宛「御父母上様」とした手紙である。（『愚庵の手紙』法月俊郎・「季刊清水」24号）

裏付けはもう一つある。

『東海遊侠伝』の奥付には次のように記載されている。左は『東海遊侠伝』奥付。


明治十六年十一月廿一日版權免許
定價六十五錢
明治十七年四月　日　出板
著者兼出板人　静岡郡平民　山本五郎
東京神田區淡路町二丁目四番地寄留
發兌　興論社
東京神田區淡路町一丁目一番地
印刷所　秀英舎
東京本郷區西紺屋町二十七番地

ここに見るように、「明治十六年十一月二十一日、版権免許」とある。出版の日付は、「明治十七年四月」となっているが、当時、出版に不可欠だった「版権免許」は前年の十一月には取得しているのである。

明治政府の出版（言論）統制令は、慶応四年（一八六八）四月の太政官布告で始まり、著作物はすべて官許を不可欠とされた。以後何度か改正されたが、明治十六・十七年当時、出版は内務省へ届出、版権を得るには許可を要した。五郎は出版の一年近く前から清水を後に上京、下宿までして出版の準備を進めていたのである。

奥付の著者名山本五郎の住所は、東京神田区淡路町二丁目四番地とあるのは、五郎の寄留先であるが、これは出版元興論社の神田淡路町一丁目一番地と至近の位置であり、校正のやり取り、口絵原稿の手配など、忙しく通いつめたと思われる。

次郎長逮捕によって、おちょうの懇請で清水へ戻ったのが二月末、嘆願活動など清水で一か月を費やし、再び上京したのは三月三十日である。四月に出版するためには、製本期間を考えれば、三月三十日の時点では校正等はすべて終っていたと思われる。

『東海遊侠伝』出版の動機あるいは目的が、入獄した次郎長救援にあるとは、到底いえないのである。

望嶽亭伝説は史実か

本書は「次郎長、鉄舟と運命的出会い」と見出しにうたって、一八三頁に（西郷山岡会見時）「駿府を目指す鉄舟が由比の望嶽亭主松永氏、興津水口屋の縁から次郎長に道案内を依頼したという伝承は充分肯ける。」とある。

ほかにも（二五頁、一七〇頁）同様の記述が見られる。しかしその論拠は全く示されていない。鉄舟と次郎長が初めて会ったのは、『東海遊侠伝』では第十五回の一七八頁に松岡萬の手引きで両者が会っていると明言されているが、それについても全く触れられていない。

望嶽亭伝承を「充分肯ける」と書かれた箇所を

読んだ時、私は思わず目を疑った。当代一流の歴史学者の太鼓判が、どのような影響を及ぼすかについては、改めて云々するまでもないだろう。

本書巻末の参考文献には、若杉昌敬著「危機を救った藤屋・望嶽亭」があげられている。これに対し地元由比の手島英真氏が「望嶽亭の鉄舟危機救助説を質す」を著わし、批判の先鋒を切った。さらに「明治維新史談会（幹事田村貞雄静大名誉教授）」では、平成二十一年十月、この批判を取り上げ、会報「維新史談」112号に、望嶽亭伝承を虚構であるとする説を提示している。紙数がないので、その全容を紹介することが出来ないが、例会の席上配布された資料に、高橋本についての田村貞雄教授の所感があるので、その概要を以下に紹介したい。編集子はこの所感を支持する。

「本論に入る前に、高橋氏の史料の吟味には、一点だけ疑問があることを指摘したい、それは由比の望嶽亭の伝承への評価である。

高橋氏は『清水次郎長』（岩波書店　二〇一〇年）一八三ページで、山岡鉄舟と次郎長の出会いが、西郷山岡会談に遡るとし、望嶽亭主松永氏が、駿府を目指す山岡に次郎長を紹介したと云うのである。

東海道総督府の官軍は、参謀西郷隆盛の指揮下にあり、その先鋒はすでに品川・川崎まで進出していた。先鋒部隊は薩摩の篠原国幹と桐野利秋が指揮していた。そのなかを薩摩の益満休之助の先導で、山岡は駿府へ向かったのである。その山岡を別の官軍が襲ったと云う望嶽亭物語は、史料上実証できない。この官軍とはどの部隊だったのか。これはまったく信用できず、荒唐無稽という外はない。

勝海舟が山岡鉄舟を呼び出したのは三月五日。初対面である。山岡は翌朝出発した。望嶽亭には山岡が慶喜から貰ったというピストル（フランス公使ロッシュが慶喜に贈ったとされる）があるが、勝が山岡にピストルを渡した形跡はないし、まして慶喜が山岡に会った形跡もない。

ピストルの所持は、銃砲刀剣類所持等取締法により県公安委員会の許可が必要であるが、望嶽亭からの届出は一九八七年（昭和六十二）のことである。一〇〇年以上無登録で望嶽亭にあったことになる。

戊辰戦争の時期には、アメリカ、イギリス、フランス、スイスの武器商人が、大量の兵器を日本に持ち込んで販売しており、フランス製も大量に出回っているのである。珍しいものではない。フランス製ではあるが、製造会社名、製造年は明示されていない。江崎淳著『誰も書かなかった清水次郎長』（スポニチ出版　一九七七年）では六連発であるが、のちの『真説清水次郎長』（学習研究社　一九八三年）では、十連発になっている。

高橋氏は、「この伝承は充分肯ける」と述べているが、その根拠は記していない。」

平成二十一年秋の史跡探訪ツアー
愚庵の故郷いわき市と野口雨情生家を訪ねて

平成二十一年十一月九日十日に、天田愚庵の故郷いわき市を訪ね、愚庵研究会の人たちと交流、翌日は野口雨情生家を見学する秋の研修旅行が行なわれました。

九日、快晴のもと朝七時清水を出発、東京で乗車の方もあり総勢四十名でなごやかに出かけました。

バス内では山田副会長より天田愚庵について説明を聞きました。

愚庵はいわき市に生れ、明治元年十五歳で戊辰戦争に出陣中、父母妹が行方不明となり所在を尋ねて全国を遍歴します。山岡鉄舟の影響を受け、一時期清水次郎長の養子になったこともありました。その間に詩歌集「戊寅口占」や「東海遊侠伝」を執筆しました。

明治二十年、京都林丘寺の滴水禅師によって得度、仏門に入り京都産寧坂に庵を建て、禅と詩と歌の生活を始めます。この頃正岡子規、高浜虚子、与謝野鉄幹などと交流をもち明治の歌壇に大きな影響を与えました。明治三十二年、伏見桃山に新庵を建て明治三十七年五十一歳で生涯を終えました。この茅葺きの愚庵の旧居は昭和四十一年、出身地のいわき市松ヶ岡公園に「天田愚庵顕彰会」の努力により移築復元されました。

私たち一行は首都圏から常磐道を抜け、愚庵会の皆様が待つ松ヶ岡公園に十四時ごろ到着しました。昨年の京都研修に参加された愚庵会の野木会長と再会を喜び、愚庵の立像とともに記念撮影を

し、庵内を見学しました。中は思ったより広く京都で日常使っていた木魚などを目の前にして、愚庵を偲びました。

この後、愚庵の父母妹が眠る大宝寺を訪ね、次郎長会の竹内会長が花を供え、一同で墓参もすませました。

冬の日は傾いていましたが、野木会長の先導で塩屋崎灯台の下にある美空ひばりのみだれ髪歌碑などを見学し、宿泊先の常磐ハワイで知られるスパリゾート・ハワイアンズに着きました。

夕食会では、いわき市教育長を始め、愚庵会の役員の方々と交流をもち、楽しいひと時を過ごした後はショーの見学でした。

翌二日目は、白水町の国宝阿弥陀堂の参詣から始まりました。平安時代末期の建物は、こけら葺きで内部には阿弥陀三尊、二天王の仏像が安置されています。

阿弥陀堂の周囲には浄土庭園が昭和四十七年に復元され、数多く植えられたもみじが朝日に映え、その真っ赤な色の美しさは見事でした。

〝赤い靴はいていた　雨情生家にて

ここで野木会長、柳内副会長とお別れし、いわき市を後に北茨城市の野口雨情の生家（県史跡）に行きました。

雨情は明治十五年生れ。早稲田大学中退後、石川啄木、三木露風らと作詩に励み、大正中期になると、北原白秋、西條八十と並ぶ童謡・民謡の作家となります。生家の隣りに資料館が併設され、雨情自筆の色紙、掛軸、写真など数多く展示してあります。私は童謡の絵のある便箋セットを記念に買いました。玄関前では、誰言うとはなく私たちは自然に雨情作「赤い靴」「七つの子」「しゃぼん玉」「青い目の人形」など一斉に歌い出し、

秋の次郎長史跡探訪ツアー　於 愚庵いおり　2009.11.9

子供時代に戻ったような楽しい印象が残りました。

そして最後の草加宿の見学となりました。平成六年に建設された草加松原遊歩道は日本の道百選に選ばれ、旧日光街道沿いに六百本近い松が植えられた綾瀬川沿いの石畳みの道で、江戸時代から「千本松原」と呼ばれた名所になったそうです。

矢立橋、百代橋の二つの橋は言うまでもなく「奥の細道」に因んで作られた橋です。橋の北側ほとりに立派な「松尾芭蕉文学碑」が建てられ、皆で足を止めました。

「月日は百代の過客にして行き交う年も又旅人なり」

始めは読めなかった崩し字も次第に読めるようになり、刻まれた「奥の細道」草加の章段をみんなで声を出して読んで来ました。

歩き疲れた足でバスの待つ草加市文化会館に急ぎ、名物のせんべいを求めて帰路につきました。

（天野香）

編集室から

●今年の次郎長忌（六月十二日）は没後百十七年になります。二年後には百二十回忌を迎えます。

●参会者数千人といわれる明治二十六年（一八九三）の次郎長葬儀は何日に行われたでしょうか。当時の新聞（明治二十六年六月二十日、朝野新聞）によると、六月十五日とわかりました。

●竹内宏会長の鶴の一声で、秋の史跡探訪ツアーは、甲州黒駒の勝蔵ご子孫と親善交流をはかることになりました。行先は山梨県笛吹市です。

●幻だった船宿末廣が、徳川慶喜撮影の写真などから復元公開、来年は早くも十周年を迎えます。